

第六章 「智徳の弁」 (その一)

A. 大意

今までは、「智徳」を一つの熟語とし、ひとまとめとして論じてきたが、本章では「智」と「徳」とを区別し、その意味内容の相違を明確にすることから始めることにする。

1. 智徳の四区分と「聡明叡智」

徳（義）というのは「心の行儀」のことで、「奥漏にはじめるもの」をいう。智（恵）というのは「事物を考え事物を解し事物を合点する働き」のことだ。その徳義と智恵にもおのおの二様の別がある。徳義は「私徳」と「公德」に区分される。「私徳」というのは貞実、潔白、謙遜、律義等のごとく一心の内に属するものをいう。

「公德」というのは「人間交際の徳」のことで廉恥、公平、正中、勇強等の徳をいう。智恵もまた「私智（工夫の小智）」と「公智」とに区分される。前者は「物の理を究めて之に応ずるの働き」をする事をいい、後者は「人事の軽重大小を分別し軽小を後にして重大を先にしその時節と場所とを察するの働き」をすることをい（資料1）。以上の智徳の四区分のなかで、最も重要な働きをするのが「聡明叡智」である。何故ならその働きがなければ、「私徳私智を拓めて公德公智となすことが出来ない」からである。

2. 「徳（義）」と「智（恵）」の五つの相違

以上智徳の働きの四区分をみた。その上に立って、これから、両者の働きの違いを五つの観点から論じていくことにしよう。

1. 徳の受動性・内面性と智の能動性

徳義は一人の心の内に在るものであって、外物に関係ないもの、西洋の語でいえば「パッシブ」として、「我より働くには非ずして物に対して受け身の姿となり、唯私心を放解するの一事を以て要領と為すが如し」。それに対して智恵は能動的に外物に対して働きかけ、利害得失を考慮しつつ工夫・発明を重ねて、衆人の利益を求めらるものである。（資料2）。

2. 智と徳の機能（影響力）の相違

徳の機能の及ぶところは「先ず一家の内に在り」。それに対して智は一国の人心を動かし「よく全世界の面を一変することあり」。例えばジェイムズ・ワットの蒸気機関の発明をみよ。またアダム・スミスの経済法則の発見をみよ。徳は智の働きによってはじめてその領分をひろげ、光を放つことが出来るのだ。（資料3）。

3. 徳は昔のままですべて変わらないが、智は進歩する。

「徳義の事は古より定まりて動かず」。かつて聖人の定めた教えの大綱領は数千年の昔から変わることがない。「開闢の初めの徳も今日の徳も、其の性質に異同あることなし」。「智恵は則ち然らず」。（資料4）。

4. 徳には繩墨（客観的基準）がないが、智にはそれがある。

「徳義の事は形を以て教ゆ可からず」。教えを客観化する事が出来ないから、「以心伝心」とか、「徳義の風化」という形で伝えるだけだ。徳には客観的基準がない（「無形の徳義に試験の繩墨なし」）から、そこには「外見を飾りて人を欺く者（偽善者・偽君子）」が出現しやすい。（資料5）。しかし智は違う。「その教えに形あれば亦これを試験するにも有形の規則繩墨あり」。（資料6）。だから、智の世界には「偽智者」が出づら（資料7）。

5. 徳は「瞬時の悟道（直覚）」、智は「学理の積み重ね」

徳は「一心の工夫を以って瞬時に行う可し」。智は学びて進むべし、学ばざれば進む可からず」。(資料8)。

3. 「徳育批判」—今、何故「智（恵）」が大切か—

以上、智徳の四区分を示し、両者の相違を論じてきたが、何故そうしたかの理由は以下に在る。智徳というものは両者を兼備して初めて「十全の人類」と称することができるものである。しかるに古来学者の論ずるところをみると、十に八九は徳義の一方を主張して、ある場合には智恵などは「無用なり」と主張する者までいるありさまである。このことは「世のために最も患うべき弊害」だとおもう。何故なら、文明化が進行し「人事繁多なればこれに応ずるの心の働きも亦繁多ならざるべからず」。「私徳」だけでは文明の「人事繁多」に対処出来ない智という能動的な働きがどうしても必要なのだ。(資料9)。しかも方今、西洋文明の流入とともに、道義が頹廢してきた、だから、改めて、「徳育」が必要だ、という議論が沸き上がっている。これは「文明の洪大なるを知らず」、「人心の働きの多端なるをしらない」者の議論であるといわねばならない。今必要なのは「私徳」ではなく「智（聡明叡智）」なのだ。その事を論ずるために、まず、智徳の四区分と両者の働きの相違をみてきたのだ。

B. コメント

1. 「私徳」・「私智」、 「公德」・「公智」、と「聡明叡智」

「私徳」というのは真面目、正直、貞節といった、自欲を殺し私心を捨て去ったところに生ずるとくである。「私智」というのは大工仕事、料理、囲碁・将棋等で工夫を凝らすところにある「智」である。「公德」・「公智」というのは集団（企業、国、結社、クラブ等）内部における自分の任務・役割をきちんと果たしていく上の「徳」であり「智」である。福澤は「私徳」・「私智」を「公德」・「公智」に拡大していく「智」として「聡明叡智」という「智」に大いなる期待をよせているのである。「トマス・クラルクソン」と「ジョン・ホワード」の例をあげて。(資料10)。

2. 「徳（義）」の受動性、「智（恵）」の能動性

西洋近代思想は「肉体」と「魂」という二元論によって支えられている。そこでは、一般に、「肉体」に属するもの（本能、情念、感情等）は受動的なもの、つまり、天地宇宙の運動を受動的に受け止めそれを他に伝えて行くものと考えられ、他方「魂」に属するもの（理性や意志等）は能動的なもの、つまり、天地宇宙の運動とは別に、自ら運動の原因（能因）になりうるものと考えられている。「徳」は受動的なものであり、「智」は能動的なものである、という福澤のこの認識は以上の如き近代思想の流れのなかにあると考えられる。

3. 「徳育批判」

福澤が智徳の四区分を示し、両者の相違を詳論したのは、実践的には、当時高まってきた、「道義頹廢論」→「徳育必要論」に抗する為である。福澤は「私徳」の一方のみ教えようとするのは、「畢竟人を蔑視し人を压制してその天然を妨ぐるの挙動といわざるを得ず」と吠えるのである。この詳しい内容は次回で。